

# 葵の祈禱所

## 紀伊徳川家と高尾山

明治大学博物館 外山 徹

20

### 重倫の隠居

安永二年（七七三）一〇月、和歌山へ帰着した紀州家八代藩主重倫だが、翌月には長らく煩っていた「御所労も先ずご回避」と言う報告が葉王院にもたらされる。年が明けて一月二十四日には六女の方姫が誕生。葉王院が祈禱を始めて以来、お八百の方には二人目の出産であった。方姫は和歌山で誕生しているのので、お八百も重倫に同道して帰国したことになる。

### 安永三年の動向

紀州家の正史と言うべき『南紀徳川史』だが、明治の編纂物だけに、記事によっては信憑性について慎重な判断を要する。その記述によると、帰国翌年の安永三年は「この

歳国において養病」とある。帰国前に家臣の浅井庄左衛門が葉王院隠居湛玄に宛てた書状には「中納言殿癩氣少々快方にこれあられそうろうにつき、なお保養のため当秋中国許へあい越されそうろうはず」とあり、病状が多少上向いたので、実際に保養のため帰国する旨が述べられている。そして、帰国後間もなく快復を見た重倫は、愛妾お八百とともに新たな子の誕生という慶事を迎えていたのである。重倫にとっては一時の安息を迎えたとも言える、安永三年の動向を見てみよう。

春には前号で触れた三月の十萬枚護摩供への代参派遣があった。夏には七月一〇日付で、この年

に入ってから半年分の祈禱に対する祈禱料を納める旨の書状が到来している。包紙には「午七月銀子六十枚添」と書かれており、祈禱料は紀州家の使者が携えて登山してきたことがわかる。年初の方姫誕生前後の祈禱についてはこれまで見た通りだが、ここには、「毎月御札御指上」とあるので、月並みで祈禱を執行し、その都度、遠路はるばる御札を届けていたということになる。

書状の文末には以前と同じく三ヶ条の祈禱内容が記されている。一条目には祈禱と御札のことが記されているのみだが、白銀三十枚と後二ヶ条よりも金額が大きいことから、これは重倫に対する祈禱であることがわかる。そして、そこにはもはや「所労快然」の文字は無い。やはり、前年秋の通信にあったように、重倫の病氣は快復を見ていたと、このことから推測される。後の二ヶ条は各々白

銀十枚の後に方姫の肥立ちと産婦お八百の肥立ちが記される。

この書面で印象的なのは「紀伊殿満足存ぜられ」という一文である。葉王院の祈禱に対し重倫自身の言葉として満足であることを伝えよと言っているのである。後世の編纂物に記された伝聞ではなく、重倫の側近からの書状に書かれているだけにリアリティがある。この心持ちも長らく悩まされた病氣からの快復ゆえと考えれば自然である。

さて、以前には文末の三ヶ条の二番目には三男雅之助に対する祈禱が記されていたのだが、どうしたのだろうか？ 前年の帰国にあたって雅之助は同道されていなかった。したがって、雅之助の札が和歌山に届けられたわけではないからという解釈もできる。しかし、『南紀徳川史』によると、雅之助は安永三年二月二三日に死亡したことになっ

ている。満一歳半の短い命であった。実はその頃というのは、まさに十萬枚護摩供への代参について江戸藩邸と盛んに書状やり取りされていた頃である。以前の八千枚護摩供執行の最中には五女鋒姫の死去が取沙汰されていたので、何らかの影響が見えてもよさそうなもののだが、『南紀徳川史』に記された命日は実際とは違うのかもしれない。何れにしろ、長じて以降の記録はないので雅之助が早世であったことには違いない。重倫帰国後のことであったが、果たしてそれはどのような形で重倫の耳に入られたのだろうか。この雅之助の死については葉王院文書からは窺い知ることができない。

暮れの十二月には七月からの半年分の祈禱料が納められている。この時は包紙に「御使 金原林助 甲午十二月廿六日」というメモ書きがある。添えられた浅井の書状が

十二月一七日付なので九日後の到来である。書状と祈禱料は紀州から直接到来したのか、江戸藩邸を経由したのかは不明だが、高尾山と和歌山との間にはこれだけの距離感があった。

### 重倫の隠居

明けて安永四年は重倫にとつて区切りの年となった。『南紀徳川史』には「安永四年乙未 公三十三歳 二月病をもつて致職納め、西条侯頼淳、公襲職、これ治貞公となす」と記される。すなわち、重倫は病氣のため藩主の座を退き、西条藩主松平頼淳が跡を継ぐということである。満年齢で問もなく二十九歳の若さでの隠退であつた。松平頼淳は重倫にとつて叔父にあたる人物で、支藩である伊予西条の藩主であつた。

この重倫の隠居については徳川幕府の正史である『徳川實記』に、より詳細な記事がある。  
三日紀伊中納言重倫

御身のいたわり年をへて平癒せられざれば。とかく致仕の請ひ頻りに聞こえあげらる。よりてその願いをゆるさるるよし。(中略) 松平左京大夫頼淳は本城にめして、宗家をつぐべきよし命ぜられ。徳川の御家号をゆるさる。

つまり、前々からの病氣が治らないため、重倫側からしきりに辞任を願ひ出していたというのである。『南紀徳川史』にも、「前年十一月二十九日三浦長門守を江戸へお差し下しご内意仰せ出され、当正月二十一日水野土佐守を以てお差出なり」と、紀州家の家臣が出席して隠居を願ひ出している記事がある。それに対し、幕府は上使松平右京大夫・板倉佐渡守を派遣し、「ご病身につきお願ひの通りご隠居仰せ出され、左京大夫様治貞卿ご相続これを仰せ出され」との回答を伝えた。そして、「三月十一日御隠居の御礼

御名代 左近将監様を以て仰せ上げらる」と、自身は一度も登城することなく、在国のまま藩主の座を退くことになった。重倫の隠居にあつたのは、穏やかならざる逸話も残されている。幕府の上使がもたらした隠居を命ずる奉書（將軍の意向を老中が承つて伝える書のこと）を取り次ぐ役となつた村上伊予守は重倫の逆鱗に触れ手打ちとなることを覚悟し、家族と水盃を交わして出仕したとする。また、上使が遣わされたことに関して、罪状を糾問されての隠居だったのではないかと疑念を持たれたり、家臣の側が重倫の手荒な行状に耐えかねて隠居を諫言したという説もあつた。

数え三〇歳という若さでの隠居に、諸書は「乱行の殿様の止むを得ない引退を周囲が進めたとするものが多く、重倫に対する評価は厳しい。実際、藩主としての政治的な事跡は無きに等しいが、『南



隠居後に重倫が移った和歌山城西の丸の庭園 朝な夕なにこの景色を眺めたであろうか

紀徳川史』はこれらの俗説を紹介しつつも、真偽の程には否定的で、「ご退隠の事も御跡ご相続の事もみな、公（重倫）よりのお願ひ立てによりしもの」と記している。

重倫の若すぎる隠居の真相は果たしていかなるものであつたのか？ 前々年秋の帰国後、一時は快復の途にあつた病氣が再び悪化したのだろうか？ その直接の原因に

ついて葉王院文書が語ることはない。しかし、葉王院文書からは、少なくとも巷間伝えられる重倫の人物像とは異なつた印象が感じられるのである。このことについては、後日、あらためて重倫の人物像を振り返つてみることにしたい。

おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。